

和音の本音

KAZUNE SHIMIZU - TRUE NOTES

#6

「音楽はなだらかに人生を誘導する。」

ききて・文||青澤隆明
Text= Takahiro Asanuma

ゆるやかに、静かに、確実に。

人生がいつ始まっているのかはわからない。

父が京都の織物屋である実家から出て、東京で暮らすようになり、25歳で授かった長男を「和音」と名づけたときには、すでに音楽家の物語は始まっていたともいえる。

名前までつけられて、逃れようがない、と本人は言うが、気がつくときピアノは弾けていたし、楽譜も読めていた。そうして、清水和音はピアニストになり、ステージが嫌で嫌で仕方がないのに、音楽家の世界にびったりはまっていた。自然発露して、不思議なほどに。

きっと、音楽家の心をもって、ピアニストの手をもって、この世に生まれてきた、ということなのだろう。しかも、人々に求められながら、その仕事を休みなく続けて、もう38年にもなる。なぜかと問えば、やはり音楽が好きだった、ということになるのだろうか。

「自分で決めて生まれてきたのかも知らないね。ぼくはこれをやるんだ、って。

まあ、好きなんだろう、たぶんね。ピアニストのなかではオーケストラの曲はよく知ってるほうだと思っし、ピアノを離れると、とたんに音楽は好きなんだよね。

いや、ピアニストを聴くと、職業柄いろいろなことが出てきて嫌なんだよ(笑)。自分はこうじゃないとか、この演奏はここが気に入らないとか、そういう余計なことが瞬時に出てきちゃって、たちまち嫌な人間になる(笑)。

——音楽が好きだと言う人は多いし、人によっては音楽なしでは生きていけない、とか言ったりしますけれど、そもそも音楽が好きっていうのは、どういうことだと思えますか？

「なんなんだろうね。改めて聞かれれば、ぼくもいろいろなものを聴いてきたし、

好きに決まっているとも思うけれど。音楽で感情が動くということも、よく知っているしね。

かといって、いま日常的に音楽会にぜひ行きたいという気持ちは、自分のなかには絶対にはないです(笑)。

——音楽だけに感情が動くわけではない……。

「そう。嫌なことがあったときに音楽会に行っても、それどころじゃなくて感情にはなんにもこないことだってあるわけだしね。

でも、いろいろな要因があるなかで、音楽って、もともと自然なかたちで心を誘導するというか。劇薬ではなくて。とってもなだらかに人生の誘導をするというかな。そんなに刺激物ではないよね。」

——そうですか？

「と、思うけれど。ゆるやかに、静かに、確実に、という感じはする。自然のようね。なにか、そういうもの……。

いや、音楽家の世界って快適なんですよ、ぼくにとってすごくね。仲間がたくさんいて、この音楽家というコミュニティのなかでは、なんとなくみんなが幸せそうで、だから前世でいいことをした人たちの集まりかも知れない(笑)。



2歳10カ月、アップライトピアノを弾く？

——和音さんの前世はなんだったのでしょうか。

「なんだったんだろうね、ぜんぜんわからない。そんなに立派なこととはしてないと思っんだ。自分が立派だったらかおかしと思うもんな」。

——しかし、控えめにみても、立派な音楽をやっていらっしやるじゃないですか。

「いや、立派な音楽をしているとも思わないけれど。自分のなかの、今回の人生で感じられることに、前世もその前も影響しているのだとしたら、なんだったんだろうな……。

いろいろひどい目にあっていたのかなあ(笑)。悪いことしたかも知れない、死刑囚だったかも知れないね、ふふふ。